2026年3月29日

受難週主日礼拝説教要約

エルサレム入城が意味するもの

（マタイ21・1～9）

一、エルサレム入城の出来事

1節をご覧ください。〈さて、一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとのベテパゲまで来たそのとき、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた〉とあります。イエスさまがエルサレムに入城されたのは何曜日の出来事だったのでしょうか。キリスト教会の歴史においては、週の初めの日、すなわち今日の日曜と受け取られてきました。ヨハネの福音書からそのように計算されたからです。

エルサレムに入城するにあたり、イエスさまは子ろばを用意させました。2節、3節です。〈「向こうの村へ行きなさい。そうすればすぐに、ろばがつながれていて、一緒に子ろばがいるのに気がつくでしょう。それをほどいて、わたしのところに連れて来なさい。もしだれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐに渡してくれます。」〉とあります。

そして、子ろばに乗ってエルサレムに入城されました。4節、5節を飛ばして、6節、7節です。〈そこで弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、ろばと子ろばを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。そこでイエスはその上に座られた〉と記されています。

この時イエスさまは、どのようなお気持ちで子ろばに乗ってエルサレムに入城されたのでしょうか。これは行間を読むことになりますが、かなり気を引き締め、険しい表情だったのではないかと、私は考えます。父である神から託された使命を遂行する「時」が来たことを知り、エルサレムに入って行かれたからです。

一方で、そのようなことに一切気をとめない群衆たちは、自分たちの関心事から、歓迎したようです。それが8節、9節です。〈すると非常に多くの群衆が、自分たちの上着を道に敷いた。また、木の枝を切って道に敷く者たちもいた。群衆は、イエスの前を行く者たちも後に続く者たちも、こう言って叫んだ。「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。」〉と。おそらくイエスさまは、彼らを喜ふわけでなく、軽蔑するわけでもなく、たんたんと主の御計画が成ることを祈っておられたことと思います。

二、エルサレム入城の意味

福音書記者マタイは、この出来事に、聖書の預言が成就したことを見ました。それが、4節、5節です。〈このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった。「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。』」〉とあります。

マタイは、イザヤ書とゼカリヤ書の預言を組み合わせて語っています。「組み合わせた」と申しましたが、旧約の預言が頭に入っていたので、御霊の導きの下で、自由に組み合わせたのだと思います。

やや長いですが、ゼカリヤ書9章9節と10節を見てまいります。〈娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶えさせる。戦いの弓も絶たれる。彼は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る〉とあります。ゼカリヤ書は、9章9節と10節でひとまとまりになっています。そうしますと、マタイが引用したのは前半の9節のみであることが分かります。後半である10節は、もちろんイエスさまには当てはまりません。世の終わりに到来するイスラエルの姿としての預言のことばと受け止めることができます。

神の王国の王とは、人となられた神イエス・キリストです。王である神は、やがて私共一人ひとりが聖なる神の前に立った時、生きていた時の行いが（どのようにしてかは分かりませんが）、並べられて「なぜ、このようなことをしたのか」と問い糾されることでありましょう。同時に、「あなたの罪過は、イエス・キリストの贖いのゆえに赦されている」と語られることでありましょう。

三、私たちの賛美

イエスさまを出迎えた群衆たちは「ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に」と賛美し、叫びました。賛美の歌詞そのものは、私共が歌うワーシップソングにそのまま取り入れても恵まれる歌詞と言えます。ですが、十字架による贖いと復活による善き知らせが根底にないと、浮き草になってしまいます。かの群衆と同じようにならないためにも、神のことばである聖書と、聖書の中心であるイエス・キリストの善き知らせを捉えて行きたい者です。

私共が神の王国の王としてあがめる主イエス・キリストは、柔和な方であり、ろばに乗り、荷ろばの子である、子ろばに乗られたお方です。